地方都市中心市街地におけるデザイン・アートワークの役割 その2　プリン長岡における実践

A Case Study on a Function of Design and Art Work at the Central Area of a Domestic Cities

遠藤　良太郎
ENDO Ryotaro

池田　光宏
IKEDA Mitsuhiro

澤田　雅浩
SAWADA Masahiro

山田　博行
YAMADA Hiroyuki

キーワード：低未利用空間，中心市街地，アートワーク
Keywords：Empty Space, Downtown, ArtWork

There is a lot of empty space in the center of a local city.
On the other hand, some people want to work in these area.
A variety of activities to improve the vitality of the city.
Design and artwork is good compatibility with the space of the city.
By performing the design and artwork in the empty space, to study whether there is any impact on the town.

１．はじめに

長岡市の中心市街地ではアオーレ長岡やまちなかキャンパス長岡の設置など、再開発が進み、中心市街地の再生が進んでいるが、一方で再開発等の大規模事業対象地域外では、空きスペースは増大している。一階部分の空きスペースの中には飲食店等が出店し、状況は少しずつ変わりつつあるともいえるが、特にオーナーが積極的な利活用に対して特段の関心がないが故、そういったマーケットに出てこない空間も依然として存在している。

今日の美術／芸術領域では、作品が作られるコンテクストとしての都市や街などの風土文化を足場とするサイトスペシフィック（場所の特性を考慮するという意味）な創作は、従来の美術／芸術領域の枠を超えて様々な取り組みがなされている。さらに“関係性の美学”という概念により、リレーショナル・アート（関係性をその作品行為のコンセプトとするアート）は、これも同様に多様な展開を見せており、これら二つの潮流は、様々な地域や場所を舞台としたアート･イベント（ビエンナーレ､トリエンナーレ等）や、個々の作品のなかで取り組まれ一定の評価を得ている。

これらの取り組みは、“関係性を築くことそのものがアートだ”という位相を開拓し、そうした活動の根底を支えるアーティストの有機的な連携や、組織化は単なる共同作業場を超えたオルタナティブな拠点として、人の意識や場の意味の変革を促す契機として様々な形態を取りながら社会的なコンテクストとして街の中に定着し始めている。

本研究では、そういった背景を踏まえた上で、長岡の中心市街地でデザイン・アートワークが果たす役割を検証するため、実際に空き物件を賃借し、具体的な活動を実験的に展開するものである。

２．研究の方法

今回は３年間の研究期間の二年目となる。昨年度は前述の研究目的に鑑み、長岡市中心市街地における低未利用空間の実状を把握した上で、具体的な活動場所の選定、場所のリノベーション作業、さらには行政や NPO との連携体制の構築を行った。北九州市で開催されているリノベーションスクールが代表的ではあるが、各地でリノベーションまちづくりに関する取組が加速する中、この実践研究に関しても行政当局等の理解と協力が得られたことは一つの成果である。本年度は、実際に空間の利活用を進めること、そこにどのような主体が関わり、デザイン・アートワークが及ぼす影響を参与的に観察することを中心としつつ、空間としての社会定着のあり方だけでなく、そこに関わる人々の活動領域の拡大などにも注目しながら実践を進めてきたものである。

３．プリン長岡での活動

平成 27 年 12 月 1 日に今回の実践研究の拠点である大手通に面した第一安達ビル（空間としての名称はプリン長岡）でオープニングを開催してから、具体的な活動が始まることとなった。昨年度の活動ではあるが、年末年始を活用した公開制作、従来は旧大和デパート（現カーネーションプラザ）を主会場として開催してきた「ヤングアート長岡」の会場として、上階空間も活用した展示等の実施などを行い、街の中への定着をはかるとともに、場を活用してどのような取組ができるのかという可能性について、長岡造形大学の学生にも実感してもらう機会が設定されてきた。

それらの活動をより深化させるべく、平成 28 年度も活動を進めた。主な活動は表１の通りである。

なお、学生団体 Arc に依頼した一階部分の塗装につい

表１　2016 年度の主な活動

日程	内　容
2016/6/18	学生団体 Arc による１階空間の塗装
6/25－7/15	大学院生（佐藤友香）による公開制作
7/30, 31	三つ星プリンフェスの開催
9/19－10/2	美術表現コース　有志展示
12/1	美術表現実習２（３年次）インスタレーション実習
12 月中旬	学生による公開制作「青春セーラーズ」
2017/1/17	学生（石坂真奈美）による卒業制作の公開制作
1/21	ヤングアート長岡のゲストアーティストによるラウンドトーク
1/26－2/3	絵画・版画コース　ゼミ２（３年次）公開講評会
3/25－4/9	ヤングアート長岡

ては、奥に設置した水回り空間の今後の活用などを勘案した上で、オープニングまでの改修作業に加えて実施したものである。空間としては、あくまで装飾を排除した空間とすべく、白一色としている。これは当初からも考慮していた、アートスペースとして活用する場合には、「ホワイトキューブ」と呼ばれるような環境が望ましいという認識に基づくものである。ただし、天井部分についてはすでに照明灯の電気工事が施されていることや、そういった非構造部材を取り除き､配管等がむき出しのいわゆる「あらわし」の状態とすることも検討されたが、予算の問題もあり、塗装も含めて現状のままとしている。

ホワイトキューブとしての環境が整備された上で、長岡造形大学美術・工芸学科絵画コースおよび視覚デザイン学科ヴィジュアルデザインコースの学生による活用を進めた。大学のカリキュラム上、制作プロセスの過半をプリン長岡に設定することが難しいこと、比較的長期間にわたる制作を実施することが可能なのは相対的に通常のカリキュラムによる拘束時間の少ない大学院生が適していることなどが明らかとなった。一方で三つ星プリンフェスやヤングアート長岡など、この場を展示やイベントの会場として捉えた上で、学内のアトリエ等で制作や準備活動を行うことで、より効果的な活用につながることも明らかとなった。また、外部からゲストを呼んだ際の公開制作やトークセッションの場としても、均質でない空間が上階に存在していることなどが効果を高める可能性についても把握できた。

ただし、やはり学生を大学キャンパスからまちなかの拠点へと移動させるためにはいくつかの障害があることを改めて確認することになった。まずは学生の授業履修状況との関係である。４年次になるまでは比較的密度の濃いカリキュラム編成となっている長岡造形大学では、授業の合間を縫ってまちなかへ移動することが物理的に難しい。結果としてカリキュラムに余裕のある学生、もしくは授業時間外（５限終了以降や土日祝日など、もしくは休業期間中）に制約されることが改めて確認された。二点目は移動の問題である。一点目にも関係するが、現在キャンパスからまちなかへの移動はたとえば公共交通機関を利用しようとすれば相当に制約が厳しい。制作材料や作品を運搬しようとすれば自ずと自家用車の利用を検討することとなるが、中心市街地ではどうしても駐車料金が発生する。たとえ短時間であっても、それが度重なることで利活用を進める主体として期待する学生が大きな費用負担を強いられることとなる。そうなってしまうと、比較考量の結果、わざわざ手間とお金を費やしてまでプリン長岡で活動をすすめようという積極的な態度をとるに至らないという状況が生じていることも確認された。加えて、共同研究を進めるメンバーが利活用を図ろうとした場合も特に時間の工面という点では学生と同様の状況であり、単発のイベント的な利用にとどまらざるを得ない実状も明らかとなった。

４．複数の主体による利活用

長岡市はまち・ひと・しごと創生法に基づく地方版総合戦略「長岡リジュベネーション（長岡若返り戦略）を平成27年10月に策定している。それを受ける形で、ながおか･若者・しごと機構（以下「若者機構」）が設立され、そのオフィスおよび活動スペースとしてもプリン長岡が活用されている。これは、この空間（第一安達ビル）を賃料負担等の面から共同でNPOすまいるらいふサポートからサブリースの形式で賃借していることによる。若者の活躍の場を提供するという目的に関しては共通をしているが、実際に活用が始まるとそれぞれの主体によってこの空間をどのように捉えているかという視点や、活動量の点での違いが明らかになってきた。

若者機構は長岡市が主体となって設立した組織であり、長岡市職員や長岡商工会議所からの出向者を含め、プリン長岡の二階に設置された事務局に常駐する職員が配置されている。また、プリン長岡の一階部分の活用に関しても、ながおか若者会議の定期的な開催や、関連するイベントから副次的に生まれた各種イベントの開催場所としても比較的密度が高く運営されている。現在では下記の５つの取り組みを進めている。

１．若者と企業の情報収集・発信事業
２．若者提案プロジェクト支援事業
３．若者の出会い・居場所づくり支援事業
４．長岡で学ぶ魅力づくり事業
５．長岡で働く魅力づくり事業

例えば毎月13日に食事や飲み物を持ち寄ってコミュニケーションを図るイベント「シェア飯長岡」なども実施され、定着しつつある。それ以外にも各種の打ち合わせなどにも断続的に空間の利用が進められている。

その結果として、プリン長岡がもう一つの運営主体である長岡造形大学の研究グループの思惑と異なった空間としての性格が確立しつつある。オルタナティブな拠点として街の中へ定着させる方法論の実践と検証を進めようとしてきたものの、そこにデザインやアートワークを十分に介入させ、意識付けをすることがままならないまま、どちらかといえばソーシャルな空間としての意味合いを強く持ち始めているといえる。実際に公開制作などを進めたケースでは、そのことがきちんと情報として共有されておらず、制作現場で打ち合わせなどが開催されるなどといった事態も発生することになった。本来は場の利用についての情報共有および調整が図られることが望ましいが、前述の理由などによって、定常的な利用が卓越した場合にはどうしてもそちらに空間の利用主体としての位置づけが高まっていく、ということも確認できた。

これらも含め、複数の主体による利用の場合、活用頻度や滞在時間の多寡によってその空間としての特徴が大きく影響を受けることが明らかとなった。

５．まとめと今後の展開

平成27年度は本研究を進める拠点の選定、そしてそこでの利用実験を行った。そして平成28年度は実際の活動を展開し、参与観察的にまちなかにおけるこのような空間の意味づけを検証してきた。当初からも懸念される事項としてあげていたが、教員も学生も大学の授業等本来業務と並行しながら持続的かつ刺激的な空間利用を進めることは物理的に困難であることが改めて明らかとなった。目的が

異なる空間利用が重層的に進められることによる場所の認知が曖昧になることも再度確認されている。場所としての魅力に対する理解は深まりつつあるが、それが当初研究目的として掲げたものとは異なっていることも明らかになりつつある。また、学生もしくは卒業後の若者が活躍できる空間としての可能性についても、現時点ではその費用負担と得られる効果という点からは十分な可能性を見いだせていない。それはイベントそのもののマネジメントに学生があまり興味を示さなかったり、どちらかというとそれについては避けようとする態度からもすかし見えるものである。

すでに最終年度を迎えているが、この取組が一過性のものにならないために、どんな体制や資金計画が必要なのかについても検討を進めていく必要がある。

【参考文献】

1）遠藤良太郎ほか「地方都市中心市街地におけるデザイン・アートワークの役割」長岡造形大学研究紀要第14号，pp.6-9,2017

写真１　ホワイトキューブへの改修

写真２　大学院生の公開制作過程

写真３　三つ星プリンフェス会場風景

写真４　三つ星プリンフェス　カフェの風景

図１　三つ星プリンフェスのフライヤー

写真５　３年生有志の展覧会　入口風景

写真６　３年生有志の展覧会

写真７　インスタレーション実習

写真８　学生による卒業制作の公開制作

写真９　ラウンドトークのフライヤー

写真 10　ヤングアート長岡での展示